

感謝の心を育てる家

Cさんには高校生の娘がいます。

家庭では、日常の中で気持ちを言葉にすることを大切にしてきました。幼い頃から、手伝つてもらつた時や何かをしてもらつた時には、必ず感謝を伝えるよう声をかけてきたのです。

ところが、成長とともに、娘は口数が減り、返事も素つ気なくなりました。以前のように会話が弾むことは少なく、同じ家にいながら、心の距離を感じる日が続いていました。

そんなある休日、Cさんが台所で片付けをしていると、娘が弁当箱を差し出し、「洗つておいたよ」と一言添えました。そして、渡す瞬間に小さく「ありがとう」とつぶやいたのです。その言葉は、何気ないものでしたが、Cさんの胸に深く響きました。

思春期の揺れる心の奥に、これまで大切にしてきた思いが、静かに息づいていると感じたからです。Cさんは、言葉にしなくても伝わる親子のつながりを、そつとかみしめました。

今日の言靈 「日々の積み重ねが心を育てます」

家庭で交わされる何気ない言葉や態度は、子どもの心の土台を形づくる大切な要素です。

思春期になると表情や言動は変化しますが、それは価値観が失われたわけではありません。幼少期から繰り返し体験してきた関わりは、目に見えない部分で確実に根を張っています。相手を尊重する姿勢や、当たり前を当たり前と思わない感覚は、日常の中で自然に身につくものです。大人がどのように人と向き合い、どのような言葉を選ぶかは、子どもにとって無言の教材になります。教育の現場においても、指導や助言だけでなく、日々の接し方そのものが、子どもの心に影響を与えています。私たち教職員一人一人の振る舞いが、子どもたちの人間関係の在り方や、他者へのまなざしを育てていることを、改めて意識していきたいものです。



【今回の学び】⇒学校文化は、一人ひとりの感謝の心で作られている！